

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

令和3年7月 第245号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

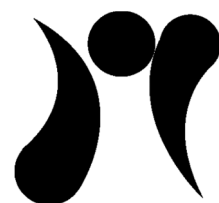
死を超えてつなぐ『人の世のバトンタッチ』

『群』で暮らす猿や象などの野生動物は、老いて『死期』を悟ると忽然と群を離れ、独り『死地』に赴きます。数ある動物の中で人間だけが、『老いて死に逝く身』を集団の中で仲間に委ね、子や仲間が世話をし、看取り、弔い、葬ってきました。人が『社会』を構成し、2000年以上にも亘って歴史を続けて来た『原点』が、『老いて死に逝く身の子や仲間に委ねる習性』と、委ねられた老いの身の子や仲間が『介護して看取り、弔い、葬る営み』に在ると確信します。

人は古来『老いて死に逝く身』を他者に委ね、『遺伝子では引継げないもの』を引継いで来ました。人の世では、『老い』にも『死』にも『使命・役割』が有り、『老いの哀しみ』や『死の悲しみ』、『死に逝く身を愛おしむ心』等が、『思想や人間性や社会性』を育み、『逝く人を看取り、弔い、葬る営み』の中で多くの人が『五感を磨いて視野を広げ、思索を深めて』、次世代に文化を引継ぎ、歴史を続けて来ました。其の『老いと死の営み』は、無防備な身で生まれた赤ん坊が十数年を掛けて『知性・理性・体力』を身に着け、『思想や人間性や社会性』を育み、生産に従事できる仲間に成長する過程の『裏返しの営み』であり、其処には何か『深い関係性』と『重要な役割』が潜んでいる様に思えます。

日本は今、団塊世代の全員が70才を超え、本格的な超高齢社会に入りました。『予防重視型』の介護保険制度の下で『健康寿命』を伸ばす事が最重要課題とされ、誰もが介護を要する身にならない様に努力し、ご家族や介護職も全力で支援します。日本ではこの40数年の間『長寿化』と同時に『少子化』が進行して来ました。今40才代後半の団塊ジュニア世代は同級生が200万人を超えていますが、令和2年生まれの子は約84万人です。我々は此の間、『老いても要介護にならぬ様に』と願い、健康を目指して懸命に努力し、更に『死』はでき得る限り先延ばししたいと願い、『延命治療』を優先しました。人にとって『死は空しく無益なもの』と信じて、老いて死に逝く身を『介護する営み』の価値を見失い、『負担』と捉えました。『老いて死に逝く姿』を観ながら若い人達の多くが『子を産み育てる勇気と歓び』を見失い、『急速な少子化』を招きました。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

超長寿の今の世で、20才代～30才代の結婚・出産適齢期の青年達の『種の保存』という、生物としての『最も根源的な本能』が希薄になってしまったのは何故か？40年以上も続く少子化の『現状』は、社会の未来にとって非常に深刻な事態だと思えます。最近では医療の発達により『老化による機能低下』への対処の幅が広がり、「老いの過程」が昔と比べて長くなりました。そして今、高齢者の最大関心事は『介護予防』と『認知症予防』です。高齢者の仲間に入る前に認知症になる『若年認知症』の人も増加し、若年ゆえの介護困難事例や経済的困窮事例・触法事件等が急増し、認知症の人を『虐待』する事件や差別事例が増え、誰もが「認知症にだけは成りたくない」と願います。永年、認知症は『根本的には治療できない』と言われましたが近年、進行を少し遅らせる薬が何種類か開発・販売されました。

認知症は進行性の病気で、初期の頃にはご本人にその自覚があり、『精神的に不安定』になり、『困惑と混乱の暮らし』が始まります。最近では多くの人がある段階で受診し、脳の血流を善くして進行を遅らせる薬を処方され、計算ドリルやカラオケで「脳トレ」に励み、抵抗を試みます。しかし幾ら予防し治療しても病状は進行し、社会の一員としての許容範囲を超える行為も生じます。最大の混乱期です。やがては『安定期』に入り、『大半の人』が辻褄の合わない言動はありながらも、数十年の暮らしで身に着いた『経験則』と、持って生まれた『感性・感覚』の働きで、『その人なりの暮らし』が成り立ちます。そしてより進行して『無防備』になった身を他者に委ね、『五感の全て』を働かせて『生』を実感する中で『死期』を悟り、穏やかに人生を締め括られます。極めて『自然な死』だと思え、例え認知症になっても、『最期善ければ全て善し』と感じます。

しかし最近、認知症の6～7割を占めるアルツハイマー病の原因物質とされる、脳内に溜まる「たんぱく質のアミロイドβ」を減少させる効果を発揮する薬がアメリカで認可されました。日本とアメリカの2つの企業が共同開発した「アデュカヌマブ」で、日本でも認可申請されて現在審査中です。日本においても『認可・販売を期待』する声が多く聞こえてきます。

認知症治療薬の開発は朗報ではありますが、『老いて死に逝く過程の心身や脳細胞に生じる事象』には、現時点における『科学的な分析』では解明し得ていない、『複合的に作用し合って生じる現象』が多々在る様に思えます。

人間社会でのみ『老いと死の営み』と『誕生と成長の営み』とが重なり合って存在し、人が社会生活の中で『思想や人間性や社会性』を育み、『文化や文明』を創り、次世代に引継いできた『原点』となって来ました。老いの過程で生じる『病気や障害や認知症』に対処し、『介護して看取り、弔い、葬り、供養して』、人は文化・文明を創造し、引継ぎ、永く歴史を続けて来たのです。

我々はこの40数年『健康長寿』を望んで励み、急速に『少子社会』を創りました。永い歴史を振り返る時、『老いと死について』我々は『大きな思い違い』をしてきた様に思えます。人が『老いや死』を直視して心に抱く『覚悟と誇り』に応じて、若人が『子を産む勇気』を抱き『育てる喜び』に出合うのです。

『介護』は、『老いと死』と『誕生と成長』とを繋ぐ『人のみが行う人ゆえの心の営み』であり、『老いと死を巡る心の揺れと覚悟』が『子を産む勇気』の背中を押し『育てる喜び』に繋げて来たのです。『介護』は『心に残る大切な別れ』の生みの親であり、思想や人間文化の『礎』とも思えます。『大切に！』

Sさんの看取り

地域密着型特養主任 齋藤 まゆみ
(介護福祉士)

Sさんは平成29年5月に入所され約4年せりょう園で生活されました。入所されたころのSさんは職員への依存心が強い方でした。トイレに行きたいと言われ、トイレ介助をしたすぐ後に再び同じ訴えがあり、再度トイレに座ってもらうと今度は『なんで私トイレに座っているんや、トイレになんて行きたくないのに』と言われることもありました。他にもベッドに寝ているときに『お姉さん起こして』と、希望があり、車いすに移ってサロンにて過ごしてもらいましたが、自分でお部屋へ戻り『お姉さん寝かして』と言われることや、サロンで過ごしている際お茶が欲しいと言われる為お茶を入れると一気に飲み干し、その後またすぐにお茶が欲しいと言われることが一日何十回もありました。近くにいる職員が他の利用者の対応をしており、すぐにSさんの対応ができないときは大声で職員を呼びました。

少しでもSさんに安心してもらおうと、職員がご本人の話を聞きますが、話が終わり職員が別のことをしようとすると険しい表情になりサロンに響き渡るような大声で『お姉さん』と職員を呼び、その声を聴いた他のご利用者が落ち着きがなくなることもよくありました。

Sさんの不安な思いが行動にあらわれていると感じ、Sさんが落ち着いて過ごしてもらうにはどうしたらいいのか会議などで職員と何度も話をしました。本や新聞を読んでもらってはどうか、歌が好きなのでCDをかけ歌を歌ってもらってはどうか、靴下工場で働いていたので編み物をしていただいたらどうか…フェイスシートの生活歴やご家族から聞いた話をもとにいろいろ実行してみました。歌を歌ったり編み物をしているときは多少穏やかに過ごせていました。訴えはずっと続いていましたがSさんに穏やかに生活してもらうためにはどうしたらいいのかを職員が考えられたのはよかったと思います。

その後骨折したり、脳梗塞を起こしたりと色々ありましたが、入所した時のことが嘘のように落ち着いた生活を送るようになりました。最期ご家族が息を引き取る瞬間に立ち会うことはできませんでしたが、コロナ禍の中でも亡くなる一ヶ月前には他の施設に入所されているご主人と面会され、亡くなる当日には呼吸状態が変化したためにご家族へ連絡をすると、ちょうどお彼岸でご家族が全員揃っており、子どもさん全員そろって面会することができました。亡くなった時のお顔は入所した頃の険しい表情はなく、とても穏やかなお顔をされていました。

振り返ってみるとSさんが認知症の中で混乱し訴えが多かったのは入所されて1年間でした。そのあとの3年間は自分の状態や環境を受け入れたのか穏やかに過ごされました。

職員はその大変だった1年間Sさんに翻弄されていましたが、その間Sさんにどうしたら安心して過ごしてもらえるかを真剣に考えていました。介護職はお年寄りに翻弄されることもまた成長に繋がるものだと思います。





真宗大谷派 真宗寺 邨上 了圓 住職

今月は真宗寺から邨上了圓住職にお越しいただきました。昨年7月にお話ししていただきましたので、1年ぶりとなります。ご住職はまず三帰依文を唱え、お話を始められます。今回は仏事についてのお話を頂きました。

浄土真宗の仏事とは、亡き人を縁として、生きていく自分を見つめるために行います。亡くなられた方から様々なことを気付かせてくださるので、縁のある方が集います。供養することで、迷いのある自分の今の姿に気付かせていただくからお勤めするのです。お寺には、「よくないことが続いて起こるから占ってもらったら、供養するように言われたので来ました。」と来られる方もあります。しかし、亡くなられた方が迷っているとか、供養しないと祟られるということはありません。お祈りをしていないことを人から言われると、それをきっかけに自分を見つめることがあります。節目節目に縁のある方が集まって仏事を勤めるということは、亡き人を縁として、今生きている自分の姿を気付かせていただくということなのです。

仏事ではお経を唱えます。お釈迦様の話されたことを様々な方、お弟子さんが受け止めて書かれたものがお経で、原本はインドのサンスクリット語で書かれています。それが中国を經由して、漢文で訳されたものが日本に入ってきました。その中のどれを拠り所にするかによって宗派が異なり、浄土真宗では浄土三部経を拠り所としています。

どのような仏事にも意味があり、葬儀では白い物、白木の物や銀色の物を仏具に使用します。これは、お釈迦様が亡くなられたときに、悲しみのあまりに周りが白く銀色のようになったという逸話からきています。私たちの仲間とお別れをするときにも、お釈迦様と同じように尊い命を終えられたのだから、お釈迦様と同じようにお送りするということになっています。仏具では紙華^{しか}という白い紙でできたものを立てるのが代表とされます。紙華は沙羅双樹の木を象ったものです。また、お棺^{しゅたら}に修多羅という組み紐をかけますが、これはお経を表しています。

お釈迦様にはもうひとつ逸話があり、生まれた時に七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と仰いました。これは、「私たち一人ひとり、どんな人も皆尊い。一人の命を頂いた皆

が尊い。」という意味です。生まれるときに親を選べず、生まれた所によりお金が有ったり無かったりと境遇が違うこともあるけれど、生まれ難き人間に生まれた、その命が尊いのです。命を尊んで生きていくのですよと、お釈迦様が仰っているという逸話なのです。

せっかく命を頂戴した、それを若い人に受け継いでいくのですが、どう伝えていけばよいのでしょうか。コロナウイルスで会えない日々が続き、テレビでは土砂崩れや大雨のニュースが流れています。昔から災害や流行り病はあり、その中で先輩たちは生きてきて、私まで命を繋いでくれています。朝「行ってきます。」と言って、帰りに「ただいま。」と会える、今まで当たり前前にしていたことが叶わないこともあります。そういう思い通りにならないこともある中で、命を育みどう生きていくのか、それを縁のある方、先に生きられた方が証明していくのです。どのように生涯を生きていくのか、その方から何を頂いたのか、それが本来の相続というものなのです。

相続といえばすぐに財産のことを考えますが、そうではありません。浄土真宗の相続とは、何を頂いていくのかということです。親鸞聖人は「雑行を棄てて本願に帰す」と仰いました。雑多な行いよりもどう生きるのか、本願ということはただ念仏しかないのです。念仏をしたから救われるというのではありません。念仏申すしか、私の助かる道はないのですよと教えてくださっているのです。

環境が変わっていく中で、どう生きていけばよいのでしょうか。私たちは生まれ難き命を頂戴して生きてきたわけですが、その生き切るということが次の世代に伝わっていくのです。そういうものがなければ、若い人も何をしたらよいのか、どう生きればよいのかということに気付けません。先輩から相続した命をどう伝えていくのか、それは日々の生活の中にしかないのかなと思います。浄土真宗の仏事というのは、そういう意味で、自分の生きている姿に気付き、次へと受け継いでいく場になるということなのです。

邨上住職、お話をありがとうございました。

ご住職のお話の途中で、私ははっとして、せりょう園での仕事のことを考えました。日々お年寄りと接する中で、様々な生き様を見せていただいています。毎日いろいろなことを受け継いでいるのだなあと、そう考えさせられました。

サービス付き高齢者向け住宅相談員：山田 麻由美
(介護福祉士)

施設内の新型コロナウイルス

ワクチン接種について

訪問看護ステーション主任 藤井 知子



昨年の4月、今年の1月に引き続き4月25日から兵庫県に三回目の緊急事態宣言が発出されています。当法人においては感染症対策を徹底して行っていますが、緊急事態宣言が発出されるたびにさらに対策を強化し、外部サービス利用中止や面会制限等でご利用者・ご家族の皆様にはご不便やご心配をおかけしています。皆様のご協力もあり、

この1年数か月なんとか感染者を出すことなく経過しています。

新型コロナウイルス感染症予防対策としましては、日ごろからの手洗い・マスク着用・三密回避等はもちろんですが、ワクチン接種が感染予防に効果的と言われています。感染拡大の中、加古川市におきましても高齢者の新型コロナワクチン集団接種が5月8日から開始されています。それに伴い、高齢者施設においても利用者・従業員の施設内接種が可能との通達がありました。

せいりょう園全事業所の利用者・従業員は約300名です。接種希望される方には施設内で接種できるよう、通達があった時点で巡回接種の申し込みをしていました。300人の巡回接種となると一度に行うことは難しく、職員は副作用で業務に支障が出ることのないよう日程を分けて接種する必要があり、申し込んだものの実際どうなるのか不安でした。5月末になり加古川市から「高齢者施設における新型コロナウイルスワクチン接種について」の説明会の案内があり、6月2日に説明会に参加しました。どの施設も同様に様々な問題・不安を抱えており、説明会後の質疑応答はとても活発でした。私自身も300名の巡回接種を申し込んでおり、日程や一日の接種人数を確認し、まずは自施設で協力医を確保することが早期の接種開始につながるとアドバイスをいただきました。

説明会から帰って早速、以前往診に来ていただいたことのある先生に連絡してみました。先生は加古川市の集団接種にも出務しているとのことでしたが、せいりょう園の状況を伝えると協力してくださることとなりました。また、もう一名の先生にも依頼してみてもとの進言もいただきました。もう一人の先生にも連絡し、事情を伝えると集団接種出務もされているとのことでしたが快諾いただきました。説明会に参加することで、どうすれば施設内での接種を少しでも早期に進めることができるかがわかり、一歩踏み出すことができました。

開始することが決定し、接種日程の割り振り・場所・流れ・接種リスト作成・書類提出・当日の接種及び事務人員の確保等、限りある日程ではありましたが職員で協力しなんとか6月19日からの接種開始にこぎつけることができました。接種当日は皆様初めての接種ということで、接種する側もされる側も緊張していたように思います。接種は10日に分けて日程を組んでおり、最終は7月30日の予定です。ワクチンを無駄にすることなく、皆様に確実に

接種していただけるよう基本に忠実に、細心の注意を払って業務にあたっていきたいと思っています。

緊急事態宣言の効果で人流が減り感染者が減少している今、ワクチン接種を進めることにより今後の感染拡大がおさえられることを願っています。大多数の方がワクチン接種を受けることで集団の中での感染拡大を起こすリスクは減少するのではないかと考えます。

ワクチン接種をしたからと言って、今まで行っている感染対策をすべてしなくていいわけではありません。今しばらくは基本の手洗い・消毒・マスク着用等は引き続き行っていく必要があると思われます。

基本の感染対策の継続とワクチン接種により、人と人との触れ合いが様々な形で少しずつでもできるようになることを願っています。



せいりょう園で働いて

地域密着型特養 長谷川 奈緒子
(介護福祉士)

私がせいりょう園で働き始めて早6年が経ちました。以前、他の特別養護老人ホームで介護職として働いていましたが、ブランクが長く、小学生と幼稚園の子どもがいて頼れる人がいない中で、介護職として働いていけるか不安でいっぱいだったのを今でもよく覚えています。実際働いてみると、子どもの体調不良で急に休むことになったり、何日も休んで仕事に穴をあけることがありました。何度迷惑を掛けたか数えきれませんが、私が出勤すると他の職員は嫌な顔一つせず、子どもの心配までしてくれて、とても恵まれた環境で働かせてもらってるなと感じました。

春休み、夏休み、冬休みなどの長期の休みには、せいりょう園のキッズクラブを利用しました。短時間勤務なので学童保育には行けず、子どもたちだけ家に残し仕事に行くのが不安だったのでとても助かりました。何より、子どもがとても楽しかったようで、帰りの車の中で「今日は忍者ごっこをして楽しかった」とお手製の手裏剣を見せてくれたり、毎日先生や友達と家ではできない様な遊びをさせてもらい嬉しそうに話してくれて「毎日キッズクラブに行きたい」と言うほどでした。また、利用者の方と風船バレーや折り紙を一緒にしたりとお年寄りとも触れ合うことができ子どもにとっても、とてもいい経験をたくさんさせていただきました。

よく「地域で子育て」という言葉を耳にしますが、まさにせいりょう園のことだと思っています。私が今まで働いてこられたのも働きやすい環境と周りのサポートのお陰だと思っています。これからも頑張っていきたいです。

グループホーム入居者募集！

グループホームは認知症の診断がある事が入居の要件になりますが、認知症だからといって何もできない訳ではなく、これまで自宅で過ごしていたような日常がグループホームにはあり、これまで培ってきたその方の生活力が活かされ、穏やかな時間が流れています。それは、居室にトイレ・洗面台・浴室・ミニキッチンを設え、家庭と同じようにそれぞれのお部屋で暮らしが完結する生活空間が、その方の生きる力を奪わない介護に繋がり、最期まで生活者としての暮らしを実現しています。

入居期間が10年以上の方もおられますが、入居時には看取りを見据えての生活設計をご家族と共に話し合っており、最期までグループホームで暮らせませす。



※浴室・ミニキッチンがない居室もあります。詳しくはお問合せ下さい。

グループホームの浴室を改装しました！

6月に共用の浴槽がこれまでのリフト型からスライド式に改装が完了し、介護度が重度になっても、入居者の皆様がより安心して入浴できるようになりました。



① 浴槽の外でイスに座る



② 浴槽横のレールで移動する



③ イスを下げる



④ 湯船の中でも安定した体勢が保てる

【 せいりょう園空き情報 7月20日現在 】

・サービス付き高齢者向け住宅

① リバティかこがわ：5室 ② 自愛の家さくら：8室

・グループホーム：1室 ・グループホームまどか：1室

・グループハウス岸本邸：1室 ・ケアハウス：2室

[問合せ先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



【お知らせ】8月の仏教講話はお休みです。次は9月6日（月）になります。